



熊本支部報

日本山岳会熊本支部

No. 2 平成3年3月31日
 発行 日本山岳会 熊本支部
 熊本市二本木3丁目3-8
 (田上敏行・気付)
 TEL 096-324-1200
 編集 本田誠也・川端浩文
 印刷 印刷・上田
 熊本市南熊本5丁目11-10

目次

・永年会員になって	1	・追悼	17
・会員随想	2	・会務報告	18
・私の海外登山メモ	12	・会員報告	19
・会員名簿	15	・編集雑感	20

永年会員になって

支部長 奥野正亥

1989年の年次晩餐会に出席した時、その年に永年会員になられた望月達夫さんから、「来年は貴方の番ですね」と言われた。永年会員が俄に身近くなったのを感じたが、同時に「もう50年にもなるのか……」と、入会当時のことを強く思い出したものであった。当時、私は朝鮮（現在の韓国）にいて、金剛山でレンジャーをしていた。その数年前1933年頃、朝鮮山岳会に入会したが、良い先輩達の指導を受けて、それまでの我流の山登りに新しい風が吹きこまれた。私の登山への傾倒は一層強いものとなった。好日山荘の西岡一雄さんと知り合ったのも、この頃であった。1939年の冬には、3名のパーティにより北朝鮮の冠帽連山北尾根の初縦走に成功した。このことを西岡さんにお知らせしたところ、ぜひ記録を公表するようにと、助言された。そして日本山岳会に入会するようすすめられた。当時、日本山岳会は我が国では最大の組織であり、最高レベルの団体だと思っていたので

私のレベルでは入会は難しいと考えていた。しかし西岡さんが「高踏的なところはあるが、真面目で熱心な人なら喜んで迎え入れてくれる」と言われたので、入会を決意した。入会手続きなど解らないまま、西岡さんに紹介をお願いすることなく直接、申込書を郵送してしまった。そして1940年8月の会報第96号に新入会員として紹介された。29才の時であった。

その後、中国との戦争により1943年7月に応召、中国各地を転々としたが、敗戦で1946年1月、下関港に復員した。暫くして熊本の電話工事会社に就職し、以来20数年間九州各県をまわり歩くことになった。おかげで各地の山々を訪れることが出来たのだが、山行は業務出張の片手間的なものが多かった。山岳会との音信は、戦中戦後の混乱で途絶え勝ちであった。下関に復員後、本部宛ハガキを投函したが、数年は空白の時期があった。思い返すと戦後の登山は、屋久島や大崩山、四国

しふる山という特徴ある山の名が古くから同地に存在していたこと。(3)天孫降臨のあとに続く「此地は韓国に向ひ……」も地形的に一致すること。(4)降臨の地「豊草原の水(瑞)穂の国……」は、そこが稲作地帯であることを示すが、高祖山周辺には、この神話が作られた当時の我国最大の水田遺跡(菜畑遺跡、板付遺跡)が存在すること。以上がその理由である。おそらく、この天孫降臨神話は、その当時(多分弥生中期)における筑紫の権力者が自己の支配を正当化するための物語であろうと思われる。以前から不思議に思っていたことだが、古事記(書紀にも)の中には、あの特徴ある日本の最高峰、富士山についての記述が見られない。そのことも古事記の原型が弥生中期の筑紫で作られたことの証拠となるのではあるまいか。

カナディアンロッキー への誘い

工藤 文昭

支部設立30周年記念事業の一つとして、カナディアンロッキーの山に登ろうという話があった。しかし諸般の事情から実現には到らなかった。ところが今年の新年晩餐会の折にこの話が再度持ち上がった。35周年の事業としてやろうというのである。まだ正式に支部で話し合われていないこの時期に、私がこんな誘いをするのは、些か軽卒のそしりを免かれないが、ここではカナディアンロッキーの紹介ということで、読んでいただきたい。かつて私は、世界6大州の山や北極圏の山を訪ね夫々の地の自然と人に接してみて、もし支部が海外登山をするなら、カナダの山こそ最適であろうと推薦したのだった。その理由としては、果しなく広がる深い原始林、蒼い氷河をまとった岩峰群、碧玉のような水を湛えた湖、百花繚乱のアルパインメドウの美がある。また、隊の構成に合せて、どのようなルート

もひけることなどがあげられる。更にこの山地を日本人として初めて訪ねたのが、日本山岳会の先達、横有恒氏や三田幸夫氏らであり、それに続いて我が熊本支部の創設者、北田正三氏がある。元来、カナダの山は我々にとって縁が深いといえるのである。

カナディアンロッキーとは、北米大陸の西側に南北4,500 kmにわたり連なる大ロッキー山脈のうち、北緯50度から55度位までの約1,600 kmの区間をいうのであるが、緯度の面からいえば千島列島からカムチャッカ半島のラインに当り、日本から見れば可成り高緯度にある。そのため2,000 m足らずの山でも、氷河を持っているし、3,000 mにもなるとヒマラヤの5、6,000 m級の景観を備えている。山の殆どが石灰岩質であるため、特有の切り立った険しい岩峰が多い。海拔2,000 m位までの植生は針葉樹で、そこは野生動物の天国でもある。

クマ、シカ、野生のヤギなどの大型獣からマーモット、シマリスなどの小さいものまで人間の怖しさを知らずに遊んでいる。こんな動物達に会えるのも、ロッキーでの楽しみの一つである。私がこの地を訪れたのは、1979年7月の終り頃で、それから3週間程山に登ったり、七色の神秘的な水を湛えた湖水めぐりをしたり、またレンタカーでカナダの大平原を疾駆したりして、自由な一人旅を満喫した。旅の主目的は登山であるが、カナディアンマッターホルンの異名をもつアツシニボインは、均整のとれた美しい山で、グレードは本家のマッターホルンより上位である。

かの著名な英国の登山家、ロングスタッフ氏は、その登頂記に「私のあらゆる精神力の蓄えを完全に使い果し、元通りに回復するのに2年の歳月を要した」と、書いている。

私は、岩と氷がミックスした1,200 mの壁を13時間かけて登り、ファイナルピークに立つことができた。その後、小さなピークを3

の石鎚山などのまとまった山行以外は、殆んど日帰り程度のもので、長期休暇はおろか、たまの休日も休まずによく働いた会社人間であった。今にして我ながら呆れるやら感心するやらしているが、当時は殆んどの人がこのように働いていたものである。だが、これでは山岳会員とは名ばかりで、「驥尾に付す」という言葉通りではないかと、今頃になって自省している。永年会員となり、いただいた銀飾の会員章を老妻に見せると、「もう50年ですか、我が家の歴史でもありますね」と言ってくれた。私達は山岳会入会の翌年に結婚した。それからは、応召、転戦、復員、再出発と波乱の多い人生であった。戦争により歪められた我が家の半世紀は、このバッジの裏面史とも言えるのではないか、と思うのである。

会員随想

月山の博物ノート

石井 久夫

全国集会〈90' 蔵王の集い〉に参加したが、終了後折角東北まで来たのだからと、本田さんと一緒に月山に登ることにした。10月14日夕刻湯殿山参籠所に着いて一泊し、翌15日早朝、湯殿山神社を経て月山に向った。

晩秋の紅葉をたっぷり楽しめるだろうと、期待をこめて仙人沢を急ぐ。途中の湿地帯で多くの水生植物を見かけたが、降霜のため既に枯れている。所々に青々とした草むらがあり、その中に黄色い花が咲いている。よく見るとエゾリュウキンカである。九州の山では見られないキンポウゲ科の水辺植物で、九州のリュウキンカより葉の鋸歯が鋭くて小さい。夏に黄色の花を咲かせると聞いたが、今の時期に花が残っているのは、やはり地球温暖化のせいかな、考えさせられる状況であった。全

国的に分布しているとはいえ何となく新鮮さを感じる。月光坂の難所を登りながら周囲の山々を見渡すと、あちこちにミズナラやブナ林の黄葉が視界に入ってくるが、霧のせいでボールをかけたように霞んで見える。装束場〈施薬小屋〉について小休止すると、傍らの小さな池塘に枯れかかったミズバショウを見つけた。しかし何ともみすぼらしくて、春先きに白い仏炎苞に包まれた美しい花が咲くとは思われない。霧の中、登山道に沿ってチシマザサ〈根曲り竹〉が延々と続く。そのチシマザサの中にダケカンバが点在して、東北の山らしい雰囲気であるが、殆んどが落葉している。徐々に天気が回復して来たが、風が強くと雲が低く垂れ込めて寒さも増して来た。道ぞいにハクサンイチゲが季節外れの花を咲かせている。通常は花期が6～8月なのに10月に咲くとはどうしたものか、葉は霜のため黄色く枯れているが、花はまだ白くあざやかである。じつは白く見える花卉のようなものはガク片なので丈夫なのか、ともかく前々から見たいと思っていた花の一つであった。チシマザサの中に蕾がついたハクサンシャクナゲや、赤い実を残したナナカマドがあり、その植生群が途切れると、ハイマツが出て来た。九州では見られない自然であり、ナナカマドも丈が低い。カジ小屋を過ぎて登りつめると、広い山上台地の中に神仙池がほんやりと浮んでいる。

階段状の登路の脇に「雲の峰 いくつ崩れて 月の山」と芭蕉の句碑があった。登り始めて約3時間で月山の頂上に着いたが、寒さに震えながら休んでいると、鳥の声が段々と近づいて来た。振り返ると霧の中にイワヒバリが15、6羽位、群れて雑草の実などを啄ばんでいる。始めて実物とご対面で私の鳥のリストが一つ増えた。案内書によると月山の頂上附近は、クロユリやヒナウスユキソウなど高山植物のお花畑があるとのこと、夏期の再

訪を期して紅葉の山をあとにした。



天孫降臨の山

田上 敏行

我国の歴史のなかで最も古い山の名は何だろうか、おそらくそれは神話に登場する「天孫降臨の山」であろう。昨秋、佐賀県の天山へ登った帰り、近くの吉野ヶ里遺跡に立寄った。掘立柱の建物や物見櫓が復元され、さながら古代遺跡公園といったところで、多くの古代史ファンの見物客で賑っていた。

吉野ヶ里遺跡は弥生中、後期の我国最大規模の環濠集落と巨大な墳丘墓であり、その発見は中国の史書「魏志倭人伝」に記された倭人の世界、当時の「クニ」の様子を、遺跡を通して我々の目の前に現してくれたといえる。ところで弥生時代から古墳時代へかけての我国を知る際のよりどころとなる資料として「倭人伝」のほかに、我国最古の史書「古事記」がある。いうまでもなく古事記は天武天皇の命により、稗田阿礼が誦習した帝記・旧辞を太安万侶が撰録した説話的史書で全三巻からなる。そのうち上巻が神代の物語、神話を収めるが、そのなかの天孫降臨の頃に「筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に天降り坐しき」、すなわち天照大神は、大国主神に「国ゆずり」を承諾させたあと、孫のニニギノミコトを筑（筑）紫の日向の高千穂のクシフルタケに天降らした、とある。

このクシフルタケとは、いったい現在のどここの山のことだろうか。神話に登場する山を捜すというと、おかしいと思われるかも知れないが、神話には「その地域で実際に起った史実から原型が生じた」という側面もあるよ

うに思われるのである。「天から人が下った」というのはフィクションであるにしても、そういう神話によって「自己の支配を正当化した権力者がいた」ことは歴史的事実であろう。その意味では、神話は史実の解明に大きな価値をもつこともあるのではなかろうか。さて現在のところ、クシフルタケを日向の高千穂と解し、日杵高千穂（国見ヶ丘）或いは霧島高千穂（高千穂峰）のいずれかであろう、とするのが有力のようである。

この考えは、江戸後期の国学者、本居宣長によって提示され、以後（特に明治以降）国学が権威の座を得てより定説化してゆく。

宣長が、冒頭の「筑紫」と最後の「クシフルタケ」を省き、中間の「日向」と「高千穂」を取り上げて「宮崎県の日向」という考えを採ったのは、降臨したニニギノミコトの直系である神武天皇の東遷発進伝説の残る「日向国」に合わせようとする、いわば彼の皇室中心主義的な考え方によるものであろう。

しかし宣長以前には、むしろ原文通りに「筑紫」すなわち福岡県のなかに求める説が有力だったといわれている。ところで最近、クシフルタケを福岡市の西南部にある高祖山(416m)に比定する説がある。原田大六著「実在した神話」、古田武彦著「盗まれた神話」によれば、(1)原文に「筑紫」とあること。(2)高祖山近くに「日向」の地名があること。(3)慶長年間に書かれた黒田長政の書状に、当時、高祖山を地元では「くしふる山」と呼んでいた記述があること。以上の論証を挙げて高祖山こそ問題の「天孫降臨の山」であるという結論に導いている。なお「高千穂」は高い山が連なった（丁度、稲穂のように）さまを表す普通名詞であるとする。古事記について書かれた本は多いが、それらを批判的に読んだうえで、ここでは「古田説」が論理的に最も正しいと、私は考える。すなわち、(1)原文に沿った無理のない解釈であること。(2)く

峰登り、フィナーレは氷雪の山、アサバスカであった。この山は四方を氷河で護られていて、氷雪の壁が山頂までつき上げている。

カナダでも代表的な美しい山である。私がパークワーマン（森林監視官）に登山届を出して、単独でアタックするのだと言うと、クレバスが多く危険なので、パートナーを探せと注意された。全く見ず知らずの者と組んで登るより、単独の方がむしろ安全だと注意を無視して、夜半2時、北天に輝く十字星に見守られながら1人で出発した。しかし途中吹雪かれて方位を見失うなど、苦斗の果てに頂上に立った。その様子を下からピノキューラーで確認されていて、下山後叱責されたり、祝福も受けた日くつきの山であった。

コースを選べば、快適な氷河の登高が楽しめる山であり、山頂から俯瞰する周辺の氷河群は圧巻である。カナダの山を歩いて既に10年を過ぎたのに、恰も昨日のことに印象は鮮明である。短かい駆け足のような山脈であったが、カナダに行きよよかったとしみじみ思う。純朴で温かい心を持つ人に接し、新しい友をつくることができた喜びは大きい。それに観光地でさえ、手つかずの自然の姿が残り、野生の動物たちも人間を警戒する様子もなく、すべて自然があるがままに存在している。今でこそ世界各地の秘境を訪ねて、多くの人達が出掛けるのだが、当時日本の海外登山はヒマラヤか欧州アルプスに偏っていたように思う。

私もヒマラヤやアルプスの後にカナダを訪ねたのだが、アルプスの箱庭的な美しさに比べ、カナダの山はスケールが大きく、原始の自然があり登山の感動も大きかった。機会を見つけてもう一度でかけたいと思う。

1990年夏の東北路

松本 莞爾

遠く雪をかぶった山なみを望み、足元には高山植物の花が咲き乱れ、何処からか澄みきったホルンの音が流れてくる。のどかな一人の山旅。時間の制約もなく、気の向くまま、足の向くまま、そんな山行きをして見たい。本来、山登りとはこんな発想から始まり、ロマンを追いかけてゆくものと思っていたが、現実の私の登山人生は、人や行事や時間に追われ、とてもロマンチックな環境とは程遠いものであった。年間を通じて50~60日は山に入っているものの、今だかつて自由気ままな一人旅はない。いつも今年こそはと思うが実現できないでいた。そんな折チャンス到来、一人旅とはいかないが、実年男3人で東北の山をゆっくり歩こう、ということになった。メンバーは工藤（会員）、永田、それに私の3人、いずれも高校の教師である。年令も40代後半、そろそろ無理がきかないコーナーに差しかかっている。そろって宮城県蔵王山地でのインターハイに参加したが、その帰りにゆっくり3人旅を楽しもうということになった。工藤先生のパジェロで俳聖・芭蕉「奥の細道」の東北路をなぞることにした。先ず、「閑かさや岩にしみいる蟬の声」の山寺、「雲の峰いくつ崩れて月の山」の月山、最上川を下り酒田から象潟に至り「南に鳥海、天をささへ……」と記された鳥海山に登った。残雪が意外に少ない斜面にチングルマ、クロユリ、サクラ草などを見て心が和む。旅程は1日1山、毎日温泉泊りとしたが、さらに東北三大祭の見物を入れることも忘れなかった。7月29日に熊本を立ち、北陸道を北上して東北路に入ったが、快晴の蔵王・熊野岳から下って山形の花笠おどり、秋田の竿灯、またソバのルーツを探るため新潟県の十日町を訪ねるな

ど、まことに多彩かつ悠々とした、実年男3人旅であった。山に憧れ、自然に親しみ、ロマンを追いかけて25年が過ぎた。若い頃は岩登りに情熱をかたむけ、冬山の厳しさに身を投じ、がむしゃらに登り続けてきたが、いまはそろそろ、それをまとめる年齢になってきたように思う。原点にかえって、視野の広い山登りをしたいものである。

直感と実行力の狭間

今野 善郎

その時、不吉な予感が確かに私にあった。テントの外に出て右足を持ち上げた瞬間、「ズシン」という鈍く低い音とともに両足をすくわれて前に倒れた。表層雪崩だった。何を考える間もなく、ただ雪崩に押し流されていた。その時、同僚のトムが残っていたオレンジ色のテントも、すぐ横を同じ早さで流されているのが見えた。1980年9月21日の朝8時、日本山岳会学生部インド・ブリグバント峰(6,777 m)登山隊の、第1キャンプ(5,450 m)の事故であった。この時、トーマス・ルゴー(25才)は、テントに入ったまま約500m墜落して死亡し、私は絶壁の端30cmのところ引掛かり気を失って止まっていた。事故の直接の原因は、一晩で1m以上という豪雪であった。前日の夕刻にはシューズで登ったC1なのに、目が覚めてみたら何と胸まで埋まる程であった。自然の力に全くねじ伏せられた思いであった。しかし、この雪崩事故は私に適切な状況判断力と実行力があれば避けられた事故だった。なぜなら、早朝5時に起きてテントの外に出た時、「雪崩が起きる」との直感があった。だから事故発生の8時までの3時間、安全地帯に退避することは十分に出来たのだった。雪国の山形に生まれ育ち、日本の多くの冬山を経験している私は、トムに「アバランシュ(雪崩)が出

そうだ」と、慣れない英語とポーズで説明するが、雪の体験と知識が少ない彼は「だいいょうぶ、がまん、がまん」と繰り返すのみであった。多様に変化する自然の中で、安全性の限界を越えているか否かを明確に認識することには個人差がある。それは各人が持っている勘というか、防衛本能というのか、その人の直感に頼るしかないのではないか。「だいいょうぶ、がまん、がまん」と言われて、私は何も言い返せなかった。直感はいくまでも直感であり、それを感じていない相手を説得するのはむずかしい。

この直感から適切な状況判断へ、この判断から実行力へと移行させるところの力こそ、登山で最も大切なものなのではないかと思う。

また、この力は経験から育つものであると思う。もし私にこの力があつたなら、例え2人の間に認識のずれがあつたとしても、それを飛び越えて相手の首根っこを押えてでも、強引に安全地帯に逃げこむことが出来たはずだ。しかし私の経験不足は、「危険だ」という直感と、「危険だからすぐ逃げる」という実行動を起こさせる、心理契機との間隙を埋めることが出来なかった。

河上洋子の近況報告

河上 洋子

毎日毎日、ひたすら歩いております。地図で探したお宅を一軒一軒、選挙で最も有効とされる「あいさつ」活動です。支持者カードを寄せて下さっただけで、一面識もない方が大部分。ただ私を支持して下さるといっただけのご縁です。相手の方にとっては、不意に時間かまわずの訪問者はご迷惑でしょうが、今はそんなこと言っておれない心情です。それにしても熊本は道路、特に生活道路の悪さ理不尽さは、全く想像以上です。ついお隣の家なのに、そのお宅の玄関に立つためには、一

たん大通りに出て、人一人横になって通らねばならない小径を、ぐるりと廻ったところ、など言うのはザラです。車で走れば不意に路幅が半分になったり、行き止りの袋小路になったり、よくまあ皆さん、頭痛も起さず、迷うこともなく住みつけられると思います。(私の所だって同じ事情ですが……) それからも一つ。日本人の「住」感覚がかくも変化したのか、と思うのも再々です。マイタウンとか、ニュータウンとか、とも角、山を削りまたは広い畑の真ん中に、突如、北欧風の屋並みや、南仏の町を思わせる白く明るい集落が出現するのです。どこの家も門扉がびったりと閉ざされ、玄関ではインターホンをピンポンと押します。「何方、何のご用」ときびしく誰何され、揚句「うちは間に合ってます」。豪華な高層マンションでは、暗号の様に部屋番号を押さないと、ドアが開きません。団地の家々の門には、申し合せたように「猛犬注意」の貼り紙です。防犯上は完備でしょうが何となく社会との接点をみんな断ち切って、家族だけで向き合っている様な、ある種の寂しさを感じます。昔のように、どこもかしこも開けっ放し、行き来自由であった町の暮しを、ふとなつかしむのは老化現象なのでしょう。お昼は大方のお宅が留守です。まこと白く明るくハイカラな「住宅」のために、皆さんいじらしくも働いているのだなあ、と、我身に重ねて思います。ほっとした時は、もう老後、この素適な家の石段の昇降がシンドクなりましょうね、と独り言。地方の身近な政治に、こんな実感をもっと生かされなければと、真面目に思います。阿蘇の山なみに雪が光ります。山行も当分あきらめています。それだけに一層、山が恋しい日々。しかし、山行のおかげでまだまだ足腰は達者ですから高層マンションも平気です。

初めての北アルプス

廣永 峻一

昭和34年10月、東京(奥多摩)国体登山に参加しての帰途、私にとって初めての北アルプスへ足をのびした。熊本RCCの中島さんをリーダーに、4人のメンバーで新宿より夜行列車に乗る。150%近い乗車率で乗り込むのがやっと、松本に着くまで立ったままの状態であった。早朝6時に大町着、駅近くの古原和美氏(当時、大町保健所長)宅に荷を置き、食糧など若干の買物をする。クロヨンダム工事中で、一般の車の乗り入れは出来ないとのことであったが、中島リーダー(九電勤務)は東電事務所へ交渉に行き、扇沢まで歩かずに入れることになりひとまず安心する。小雨降る大町を後に扇沢へむかう。籠川沿いにさむざむとしたカラマツ林をいくつか過ぎて行くと、突然、山中に大集落が現われる。ダム建設作業員の宿舎群であった。全国から人が集まり厳冬期も工事が続けられるのであろう。

扇沢へ着いて宿舎でお茶をいただき、古原のばあさま差入れのオニギリをほおばる。そほ降る雨の中を大沢小屋へ向けて出発。身の丈程もある大きなタイヤをつけた20トンダンプが地響きをたてて通る。間もなく右手にトンネルの入口が現われる。工事の喧騒をあとに、静まりかえった針ノ木谷に入る。時期外れのためか、他に人影はない。雲はいよいよ低く谷の林を濡らす。大沢小屋に着くあたりから深いガスの中を歩く。キスリングザックの荷は40kg近いが、夢にまで見た北アルプスに来て、荷は重い気分は壮快だ。小屋を過ぎて間もなく、10月中旬の雪(東大山岳部員4人が滝谷で凍死)が残る谷道に入り、ガレ場を登ること1時間ではじめて雪溪を見る。広い雪溪を注意しながら登るが、高度を増す

につれ傾斜も急になる。狭いゴルジュを過ぎると上部は大きく広がり、ここで一息入れる。また急に狭くなるあたりから谷は南へ向いて針ノ木峠も近い。そう思った時、中島リーダーから声がかかる、「廣永ノ歩き方がおかしい」。峠まであと300m、私に自覚症状はないのだが、荷を置くためピッケルで足場を掘るが、掘れない、？ ふと我にかえる。荷の半分を3人に分担してもらい、やっと腰を上げる。夕陽が落ちクラストした雪渓にアイゼンをきしませて最後の登り。風が強く頬を打つ、吹きさらしのザラ場、峠に出たのだ。雲海の彼方に槍、穂高、裏銀座の山々などがずらりと眼前に並ぶ。思わず快哉の声が出そうになるが、私の荷まで加えて重荷に喘ぐ先輩達に申し訳がない、と声をのむ。峠の小屋に着いてテント設営、夕食の準備にかかったが睡眠不足のためテントの中に倒れ込むようにして眠る。翌朝、拭ったような快晴ノ針ノ木岳山頂の2mもある大ケルンが印象的。まばゆいばかりの新雪に北アルプス全山を見渡すことができ、苦しくも楽しい山行であった。次に針ノ木谷を訪れたのは3年後の夏、白馬岳から縦走の折、針ノ木谷に下ってテントを張った。その後は毎年5月に扇沢から針ノ木大雪渓に入り、スバリ岳、針ノ木岳と廻って大沢小屋へ下るコースを歩いた。長野県の任地から熊本へ帰ったいまは、なかなか行けないこともあり、なつかしくも楽しい思い出となった。

脇坂順一先生との由布岳行

神谷 平吉

昨年の夏、スペインから一通の絵ハガキが届いた。差出人は私が尊敬してやまない久留米の脇坂順一先生。スペインの山に挑むべく同国を訪れ、先ずテネリフェ島のテーディ峰(3,718 m)に無事登頂された由。それから

1ヶ月程して今度はスイスから絵ハガキが届いた。その間にスペインの山10峰、スイスの山4峰、計14峰の登頂に成功されたとの報せ、喜寿をこえられた先生の壮挙には唯々驚嘆の外はない。その先生から春の頃、9月の連休に由布院の別荘へお誘いを受けていた。由布岳に一諸に登りましょう、ということだったが、その期待感とともに果して僕達の足で先生のペースについてゆけるかな……との不安感が交錯して、心の片隅を占め続けていた。待ちかねていたその日、ぜひ共同行したいという友人のK先生と早朝に出発。水分峠で脇坂先生と合流し、ご先導を受けて眼前に由布岳の秀麗を望む、見晴らしのよい別荘の「想山荘」に到着。暫く小雨のやむのを待って東登山口から由布岳を目指した。先生はここやかに、「今日はゆっくりしたペースで登りましょう」と先頭に立たれた。山麓は一面に穂をのぼしたスキの原、そこかしこに可憐なハギの花がほころびはじめ、初秋の薫り満ち溢れる中を歩き出す。深い雑木林の中、ジグザグにつけられた山小径。合野越の峠に出ると展望が開け、再びジグザグの登路を1時間余、体中汗ばみ些か口渴を覚える頃にも、先生は如何にも涼しげで黙々と登り続けていられる。7合目から傾斜も増し、露岩の間を縫うルートになっても、先生の歩調は変ることがない。私も家内もついてゆくのが精一杯の始末である。日頃スポーツできたえているはずのK先生も遅れ気味となり、脇坂先生の体力に感嘆することしきりであった。鞍部について雨に見舞われ昼食となったが、先生はカロリーメイトとポカリスエットという簡単な食事で、2度びっくりさせられた。支部では先生と海外の山に同行された本田さんを始めお付き合いのある方もおいでになるけれど、ほんのひとときの山行とはいえ、僕達にとってはかけがえのない貴重な2日間であった。先生の山に対するひたむきな情熱と、敢然たる

実行力、常に澁刺と希望溢れる生き方……まさに先生にとって77才は未だ青春なのである。その夜、山荘では芳醇なドイツワインのグラスを傾け、先生ご自慢のスキヤキをいただきながら、ヨーデルやモーツアルトの甘美な調べに酔い、また海外の山行のお話で夜更けるのを忘れた。今後は先生を目標に、その万分の一でもと願う最近である。

安達太良山再訪

神谷 文子

昨年夏、久しぶりに主人と2人で私の郷里福島県の白河を訪れました。その機会に安達太良山に登ろうと思立しました。と申しますのも、この山には私が18才の頃、ナースとして東京大学へ勉強に行く時、郷里の友人達と送別登山として登ったことがあり、是非もう一度という気持があったのです。東麓の岳温泉も見違える程立派になり、東京の奥座敷といった感じでした。ここから、さらに奥岳温泉までタクシーで行きましたが、ここもまた様変わりしていて、薬師岳までひっきりなしにゴンドラが上下しています。私達はこのルートを敬遠して、幾分昔ながらの静かな雰囲気を残す、勢至平へ向かいました。山路の傍らに、紫色のギボウシの花が咲き乱れて、思わず心がはずみます。深い雑木林には、九州では数少ないカラマツなどが交じっていて、久し振りで郷里の山を歩く感慨がありました。勢至平は、広く開けた草原で、カラマツやダケカンバの林に囲まれ、所々にうっすらと赤みを帯びたナナカマドも交じり、何よりも無数ともいえる赤トンボが澄んだ青空に乱舞して、早や初秋の訪れを思わせました。この草原を過ぎて暫く行くと、次第に植生も少なくなり、やがて赤茶けた山肌をあらわにします。峰の辻のピークで一休みした後、凡そ40年ぶりで再び安達太良山（1,699 m）の山頂に立

つことが出来ました。

その昔、何だか赤茶けた山という印象だけが残っていましたが、いま山頂から馬の背や鉄山の方を眺めながら、当時のことをなつかしく思い出すことができました。帰路は薬師岳へまわり、ゴンドラリフトで奥岳温泉へ下り、岳温泉への長い道のりを夕陽を背に、満ち足りた心で歩き続けました。

冬山に魅せられて

加藤 稜子

昨年八ヶ岳について、今年も冬の中央アルプスの山に登ることができた。メンバーは6名、二度目とあって少しは余裕のある冬山行であった。千畳敷カールの登りでは、昨年2月の雪崩事故のことが頭をよぎり、上方を時々見上げながら一步一步足を進めた。

静謐な飽くまでも清らかなこの白銀の世界のどこにそんな恐ろしいことが起きるのかと、ビギナーの私には信じられない気持だった。

木曾駒ヶ岳（2,956 m）山頂からの360度の展望は圧巻。さすが中央アルプスの盟主と納得。紺碧の空の彼方に白銀の峰の連なり。どっしりと貫禄のある御岳、乗鞍を始め遠く白山、深い刻みのある穂高連峰、南アルプス連山の上に頭一つ高い富士山、八ヶ岳からのそれとは違って一寸異様な感じの富士である。このすばらしい景観を、この時間に私たちは占有したのだ。宝剣岳（2,931 m）はきびしい岩稜の山。夏道を避けて、堅雪がつまった急峻な岩溝を直登する。4人でアンザイレンしてアタックする。ピリッとした緊張感のなかに広吉リーダーの大声の指示がとぶ。一步一步確実に足を確保！ アイゼンをしっかり蹴り込む！ 安全な所から動けというまで動くな！ ザイルは飽くまでも補助、自分の力で登れ！ ピッケルをしっかり打ち込め、尻をつくな！ ハイ、ハイと返事はするもののと

にかく必死である。下りはまた一段と緊張感が増す。後向きから前向きに足を踏みかえた途端、左足が流れて尻もちをつきツルリと滑りそうになった時は、本当にヒヤッとした。昨年についで冬山もまた天候に恵まれ、あちこちの山での遭難の報せが信じられないほど、美しく穏やかな山を満喫できた。今回もお世話いただいたリーダーの広吉さんに心より謝意を表したい。

私の好きな山

吉田 恒子

美しい高山の花を見たいと、登ったのが5年前のこと。高山植物の宝庫といわれている白馬岳は、期待に背かず色とりどりの花を咲かせ、楽しませてくれた。また、雪解けの傍らに、可憐な新芽が顔を出し、生命力の逞しさを見るようで感激した。日本三大雪渓の一つ、白馬大雪渓の登りでは、前日の台風の余波もあり悪戦苦斗であった。しかし一夜明けると、雲一つない快晴。どこまでも広い紺碧の空の下、北アルプス3,000メートル級の山々が打続く360度の大パノラマに、時の経つのも忘れ見とれてしまった。白馬岳山頂から三国境を折返えし、杓子、白馬鍾と縦走したが、この稜線沿いに沢山の高山植物があり、その都度、足を止めて覗き込み、また雷鳥との出会いもあり、大いに高山の自然を堪能する。3日目の夜は、日本で最も高い所にある鍾温泉に泊り、星空を眺めての入浴。どれもこれも初体験。天候に恵まれたことで感激を倍加した。この時以来、あの楽しさが忘れられず、夏になると日本アルプスへと足を運んでいる。ここには、九州の山とは違う高峻山岳の美しさがある。高山の花も豊富であるが残雪の白と、草木の緑とのコントラストが、まぶしい程に美しく、自然の大きさに気持まで広がるようであった。この景観が何とも

言えない。これからも、時間と体力が許す限り、登り続けたいと願っている。

登山靴と焼酎

広吉 功

がむしゃらに攀った東京時代に別れを告げ、未知の熊本市に移り住んだのが昭和52年であるから、早くも10余年が過ぎようとしている。

あの頃は、排他性が強い熊本県人気質にあって、小さな山の世界でも無視され、よく陰口を叩かれたものであった。そんな中で暇を見つけては阿蘇高岳の北面や根子岳の岩場によく通ったものである。ミヤマキリシマのピンクの花を眼下に見て、鷲ヶ峰北壁勾坂ルートに登攀、霧氷に薄化粧した根子岳の岩稜を横に見て、アイゼンのツアックを軋ませた北稜ルート。そしてブライダルベールのように輝やく氷に、無心にバイルを振った松ヶ尾谷やツベツキ谷の登攀など、谷川岳や穂高の岩場に比べるとスケールは小さいものの、生活の拠点をこの地に置いた私にとっては新たな感激との出会いであった。昭和12年11月14日、鷲ヶ峰北壁に散った五高山岳部・勾坂正道氏の遭難の資料を紐解いてみると、「山は奇妙だ、日によって大きくも見えれば小さくも見える。一本のセクリタスに心と体をつなぎあった三部員、わけても勾坂リーダーの目に、この日の北壁がどう写ったことか……〈中略〉……“垂直の散歩”は天候と、自分のコンディションがそろっただけでは成り立たない。舞台への知識と慣れが加わってはじめて“散歩”となる。この時分の北壁はゲレンデではなかった。北壁の登攀そのものが誇らしげに報告される開拓時代であった。開拓者に必要なのは勇気であり、準備期間であった。予定を突然変えた時は、とっさに“準備”が入りこむスキはない。悲劇が間もなく生れた。午後0時25分頃のことである。岩壁を1時間近

く小刻みにはいまわったあと、下降がはじまった。降りは登りよりもむずかしい。ホールドは文字どおり手さぐり、足さぐりだ。最初に右足がスリップした。小さな滑落。つぎの瞬間左足のすぐ下にあったハーケンがすっぱり抜けた。登りにも降りにもテストした古いハーケンだ。今度は大きな滑落。しかしそれでもせいぜい数メートルですむはずだった。ザイルがピンと張って、命を支えてくれるに違いなかった。が現実はいまよりも大きく食い違い過ぎていた。22才の若いリーダーは、250mも下の谷間、赤ガレ本谷から東壁に向かう崖に吸われて消えていった」。

折元秀穂著「阿蘇の岩場」より抜粋。北稜ルートは、北壁のコンタクトラインを直登せず、東側にトラバースして短い垂直部分を乗越して行く。この窓から見る根子岳の眺めが好きでよく通ったものである。推察の域を脱せぬことだが、このコンタクトラインから直登し更に北壁側へ出て行こうとして勾坂氏は非業の墜死を遂げたのであろう。時は流れて五高から熊大となり、山岳部も現代に伝統を繋いで行くが、伝統に育まれた血気盛んなこの山岳部員と、共に登攀した阿蘇の岩場は数々の思い出を残してくれた。幾多の登攀の歴史を見守り、或いは若い命を呑み込んできた北壁の下で、現役の彼等と焼酎を酌み交わし、夜が明けるまで騒いだりした。わけでもコップが無いからと、登山靴に一升瓶の焼酎をついでまわし飲みしたことなどは忘れ難い思い出である。これは根子岳東麓の鍋ノ平でのことであり、ほとんど一睡もしないまま、朝がくれば転げ回りながら焼酎で濡れた靴を履いて山口谷に入り、犬返滝でトッペをまき散らしてDガリーから4峰に上がった。ローソク岩は流石に巻いたが、両側がすっぱりと切れ落ちた通称ハーモニカと呼ばれるナイフリッジは、奇声をあげながら走り渡った。天狗の大下りをゴジゴジ登って天狗岩の頂上へ。

岩登りには必ず焼酎が相伴で、しかも徹夜で呑んで登攀に向かうことに意義を見出していた時代であった。山への心意気が具象化する時、その心象風景は大崩連山の中に抱かれ、冬の北アルプスの山々は半生の糧となり、阿蘇の鷲ヶ峰は山と人生との接点であった。私が生涯の生活の場を九州の熊本に求めた時、そこに阿蘇の山々があり、その山麓からの新たな出発は、ヨーロッパ最高峰モンブラン山頂からのスキー滑降、そしてオートルート180kmの走破であり、またカラコルムのパシーラ峰の試登と、ネパールヒマラヤ・ロブチェピークのライトエクスペディションであった。山とともに歩む人生を決めた時、傍らには阿蘇・鷲ヶ峰があり、熊本の社会人山岳会の人々から「もぐり」と蔑視されながらも、学生達と真摯に山と対座し、山靴に注いだ焼酎を酌み交わしている、忘れ得ぬ風景があった。熊本の山を語る時、阿蘇高岳北面の岩場を避けることが出来ないように、私の人生と山との接点として、鷲ヶ峰の岩場を、根子岳の岩稜を避けて語ることは出来ない。蔑視が畏敬に塗りかえられた時、思いつくことは湿った皮靴と汗と足の香りの漂う焼酎の味であり、ナイフリッジを走りまわったことであり、また鷲ヶ峰北壁に絡まる哀事に縁どられ輝やかない登攀史を綴ってきた熊大山岳部員との出会いであった。10余年の熊本での歳月の流れは、山を私の人生の中核に据えたが、その原点は「登山靴と焼酎」であったと言っても、決して過言ではないだろう。



天草の遠見山（岳）考

長田 光義

天草下島の牛深市にある遠見山と遠見岳について、その名称由来を調べて見ました。

（コンサイス日本山名辞典）には、遠見に関して「遠見岳、遠見山など、九州とその近くの島々の海岸部にある見晴しのよい山に多い名。江戸時代に、渡来する外国船を見張るための遠見番所が置かれたのに由来する……」と解説しています。これには遠見に関連する16山が集録してあり、いずれも九州南西部と東部の海岸或いは島にあります。この内2山が天草のものです。天草におけるこの名称のおこりは、天草・島原の乱後に徳川幕府の命により代官として着任した鈴木重成が、寛永18年（1641）に、遠見番所を富岡、大江崎、魚貫崎の3ヶ所に設置して、密貿易、外国船の取締り、難破船の救助に当らせました。

享保2年（1717）には、銀杏山と荒尾岳にも遠見番所が置かれ、外国船の出没がはげしくなった享保2年（1717）には、烽火場が各所に設けられ、長崎奉行所まで連絡するという仕組みになっていました。この内の銀杏山と出崎山が、後に遠見山と遠見岳と呼ばれるようになり、烽火場も保存されています。

遠見烽火場一覧表

名称	所在地	標高 (m)	遠見番所	烽火場	連絡経路
古城山 (白岩崎)	荅北町 富岡	50	寛永18年 (1641)	享保5年 (1720)	4
西平山	天草町 大江崎	286.2	〃	〃	—
出崎山 (遠見岳)	牛深市 魚貫崎	223.7	〃	〃	2
銀杏山 (遠見山)	牛深市 牛深町	217.2	享保2年 (1717)	〃	1

荒尾岳	天草町 高浜	342	〃	〃	3
元袋	荅北町 富岡	50	—	〃	5
通詞島	五和町 二江	45.1	—	〃	6
烽火山	長崎県 口之津町	67.5	—	調査中	7
湯島	大矢野町 湯島	104.2	—	〃	8
原城跡?	長崎県 有馬町	31.5	—	〃	9

私の海外登山メモ

熊本支部設立以来34年目を迎えるが、まだ支部として海外に登山隊を送ったことはない。

支部会員としては、1988年チョモランマ／サガルマタ三国友好登山隊に、馬場博行氏が北側隊員として参加した。これは西沢前支部長の尽力に負うところが大きい。この外1980年には今野善郎氏が、日本山岳会学生部のメンバーとして、インド・ブリグバント登山隊に参加している。また個人的には、多くの人達が海外登山の経験を有している。

これら個人の体験を共有することはできないが、支部を構成するメンバーの、登山行為の一つの側面として、支部のライブラリーの一部とすることをお許し願いたい。今回でそのすべてを網羅することはできないが、遂次だしていただくことにしたい。

本田 誠也

△ 1987-1 ケニア（東アフリカ）

ケニア山（ポイントレナナ） 4,985 m

┌ 桑原信夫、脇坂順一、外13名。

└ マツキンダーズキャンプより全員登頂。

△ 1987-8 パプアニューギニア
ウィルヘルム山 4,509 m
L 桑原信夫、原田俊行、外4名。ケグル
クグル、ピウンディ湖より全員登頂。

△ 1988-1 メキシコ
ポポカテペルト山 5,452 m
L 桑原信夫、浅野清彦、内田嘉弘、外7名。
トラマカス小屋より4名が登頂。本田ほ
か6名は不調のため到達5,000mで引返す。

△ 1988-8 トルコ
アララット山 5,165 m
L 桑原信夫、浅野清彦、原田俊行、外11名。
ドウバヤジッド、エリ村BCより本田ほか
8名が登頂。

△ 1989-11 台湾
玉山 3,997 m
L 本田誠也、池崎浩一、藤本多加志、
外3名。西尾根經由排雲山荘より登頂。
南峰にも登る。

△ 1990-8 中国・四川省
大姑嶺山 5,025 m
L 高橋 修、本田誠也、原田俊行、外10名。
成都、臥老、日隆、老牛園子(BC)より
全員登頂。

和仁古 昇

△ 1990-4 マレーシア(ボルネオ)
キナバル 4,101 m
初めて見るボルネオ(マレーシア・サバ州)
は、平野部からキナバル山麓の標高1,000
mパークヘッドクォータまでの間、ジャン
グルが切り開かれて荒涼とした感じであっ
た。パークヘッドクォータ(国立公園管理
事務所)の周辺は、環境がよく整備されて
キスゲなどの花が咲き乱れ、美しい眺めで
あった。ジャングルの中を登る道も、よく
手入れされていて歩き易い。道の辺にウツ
ボカズラや、キナバルザルサムなどの珍花
を多く見ることができた。山頂部は広大な

花崗岩盤の台地で、たいへん展望がよい。高
度の影響もあり、ゆっくり登ったが、来てよ
かったと満足した。

工藤 文昭

△ 1971.7~8 ヨーロッパアルプス
モンブラン 4,807 m
マッターホルン 4,477 m
メンヒ 4,099 m
全国高体連登山部ヨーロッパアルプス遠征
隊に同行し、現地では単独行動。ガイドと
共に登頂、ほかにベルニナ山群の山3座に
も登る。

△ 1972.12~1973.1 ネパール
ゴークョーカン 5,483 m
トレッキング解禁後最初の隊。L 芳野満彦
クーンブヒマール、ゴジュンバ氷河探査と
ゴークョ・ピークの登頂。

△ 1973.12~1974.1 ネパール
チュクンーリ 5,845 m
妻、典子と2人、シェルパ、ポーター4人
を同行してイムジャコーラに入る。幻の湖
を探査、チュクンに登頂する。

△ 1975.12~1976.1 東アフリカ
ケニア山 5,199 m
キリマンジャロ 5,895 m
東アフリカ登頂隊、L 芳野満彦、ケニア山
はマッキンダーズキャンプより5,000 m地
点で吹雪のため退却。キリマンジャロは高
度順化よくキボ峰に登頂。

△ 1977.7~8 グリーンランド
JAC東京を主体としたグリーンランド遠
征隊に参加、東海岸の町アンマサリックを
ベースに氷海を北上し、無名峰5座に登る。

△ 1978.12~1979.1 オセアニア
クック山(ニュージーランド) 3,764 m
コシウスコ山(オーストラリア) 2,230 m
ニュージーランド人のパートナーと2人、

プラトー小屋からリンダ氷河を経て登頂。
往復に26時間を要した。コシュウスコ山は
オーストラリアの最高峰だが、観光地化し
ていて頂上直下まで車で行ける。

- △ 1979.7~8 カナディアンロッキー
アッシニボイン山 3,618 m
アサバスカ山 3,491 m
カスケード山 2,998 m
単独、アッシニボインはカナディアンマッ
ターホルンと呼ばれる山だが、スイスの本
家より技術的には困難な山。170番目のサ
ミッターとなる。
- △ 1980.12~1981.1 南米・アルゼンチン
アコンカグア 6,959 m
アコンカグア学術登山隊 (L.原 真)に参
加、BCからフリーで単独登山を許され、
入山後8日目に北壁から登頂に成功。

今野 善郎

- △ 1978冬 北極点
日本大学北極点遠征隊 L.塚原道夫
日本人初到達であるが、私は極点を踏んで
いない。
- △ 1980.9 インド・ガログドリ
ブリグパント 6,777 m
日本山岳会学生部ブリグパント登山隊
L.塚原道夫 西稜ルートC1にて雪崩事故
のため敗退する。
- △ 1981秋 ネパールヒマラヤ
ヒマール・チュリ 7,893 m
日本大学ヒマール・チュリ登山隊
L.橋本 健、天候不良のため期限切れ、到
達7,600 mで敗退する。

長田 光義

- △ 1980.7~8 ヨーロッパアルプス
モンブラン 4,807 m
マッターホルン (ヘルンリ稜) 4,477 m
エギーユ・ド・ランデックス南東稜 2,595 m

東海山岳会ヨーロッパアルプス登山隊
L-伊藤正俊、他7名

阿南 誠志

- △ 1986.5 韓国・済州島
ハンラサン (漢山) 1,950 m
- △ 1987.11 ネパールヒマラヤ
ナンガゾン・ピーク 5,638 m
- △ 1988.4 台湾
玉山 3,997 m
- △ 1988.11 韓国・忠清南道
ケリョングサン (溪龍山) 828 m
- △ 1989.4 台湾
雪山 3,884 m
- △ 1989.10 韓国・江原道
ソルアクサン (雪岳山) 1,708 m
- △ 1989.11 韓国・済州島
ハンラサン (漢山) 1,950 m
- △ 1990.2 ケニア、タンザニア、
ケニア (ポイントレナナ) 4,985 m
キリマンジャロ 5,680 m
- △ 1990.5 台湾
玉山 3,997 m
- △ 1990.9 ヨーロッパアルプス (フランス)
モンブラン 4,807 m
- △ 1990.10 韓国・小白山脈
チリサン (智異山) 1,915 m



支 部 役 員

- | | | | |
|---------|-----------|-------|-----------|
| • 支 部 長 | 奥野正亥 | • 委 員 | 松本莞爾 菊池更生 |
| • 副支部長 | 本田誠也 | | 川端浩文 |
| • 常務委員 | 田上敏行 和仁古昇 | • 監 事 | 馬場 猛 |
| | | • 顧 問 | 西沢健一 |

追 悼

玉名 金助氏 (1899-1990)

宮崎 豊喜

予て熊本厚生病院で療養中だった玉名さんが亡くなられた。昨年11月6日のことである。享年92才という高齢であったが、12年ものながい斗病生活を通じて、最後まで意識は明晰で、再起への気迫を持ち続けられた。そのことは、昨年正月にいただいた賀状に「92才で新春を迎えました。車椅子にたよっておりますが、もう一度自力で歩けるようになりたいので、リハビリ体操の訓練にはげんでおります」と、あったことでも解る。

玉名さんは、昭和31年支部設立時からの会員であったが、当然のことながら登山との出会いは遥かに古い。昭和8年、飯星良弼先生により創立された熊本アルコウ会に、翌9年6月に入会、会員番号78番は最古参会員の一人であった。私もその後に入会したが、当時玉名さんは熊本市の長崎次郎書店運動具部におられたので、アルコウ会の連絡事務所でもあり、飯星先生の文字通り手足となって会員の連絡や勧誘に奔走されていた。仕事柄、他のスポーツ団体との接触も多く、体協設立にも参画し、後には評議員もされている。戦後暫くして独立し、タナマ運動用品店を経営されたが、持前の闊達さで飾り気のない人柄を慕って、人の出入りが多かった。アルコウ会から県岳連理事となり、暫くは岳連事務所もここに置かれた。いま還暦前後の中高年になった、当時の県内の山岳会員達は、玉名さんの名前をもじって「タマキンさん」の愛称で呼んで集まっていたものである。仕事の合間をみて、九州の山だけでなく、北アルプスや尾瀬にも足をのばされているが、晩年スイスに遊び、アルプスを眺めて感激した話もお

聞きした。ながいお付き合いだった私にとって玉名さんについて書きたいことはそれこそ山ほどもある。今更ながら惜別の情を禁じ得ないが、謹んでご冥福をお祈り申し上げたい。

内田 英夫氏 (1913-1990)

西沢 健一

日本山岳会には昭和53年5月に入会されたが、支部行事への参加は、病気で倒れられる昭和54年6月までの1年余であり、この年の6月14日、脳内出血により熊本厚生病院に入院され、以来11年に及ぶ斗病生活が始った。

不自由な体に鞭打ってリハビリに励み、一時は車椅子で屋外へ散歩ができるまで快方に向われたが、精神力の強さだけでは病魔に勝てず、日夜寝食を忘れ看病に専念されていた晴子夫人の努力も空しく、遂に昨年10月7日静かに往生を遂げられた。享年78才であった。心からご冥福をお祈り申し上げる。かようにながいの間の病院生活で、支部の皆さんの中には内田さんをご存じない方もあると思うので私の知る範囲でプロフィールの一端をご紹介します。若い頃の内田さんは澁刺としたスポーツマンであられた。昭和11年東北地方冷害の際、請われて青森県庁の栄養担当として赴任された。その時代に八甲田山など東北の山を歩き、或いはスキーに興じ青春を謳歌されたという。その後、昭和14年に熊本県庁に移られて、戦後のことになるが、私は熊本県庁山岳会の例会で何度か山にご一詣するようになった。昭和39年頃から46、47年頃にかけてのことである。阿蘇、九重方面が多く、特に印象に残っているのは昭和40年の正月、久住山に登った時のこと、12名の一行の中に交じり内田さんは元気に、筋湯から山頂を越えて赤川谷へ雪の中を歩かれた。内田さんにもう一つ健康につながる側面がある。戦後の食糧難時代に、県民の体位向上を目指して県衛生部

は、栄養を柱とした諸政策を押しすすめた。栄養担当の内田さんは、その陣頭に立って県内を隈なく廻り、指導啓蒙に奔走された。その功績は挙げるに暇がない。葬儀の際、斯界の代表の方々がかわるがわる功績を讃える弔詞を述べられたことが物語っている。自然を愛し健康に留意されていた内田さんが、こんなに早く逝かれたことが残念でならない。

会 務 報 告

◇ 支部委員会

日 時 4月14日 午後7時
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
議 題 支部総会の議案検討
出席者 奥野、本田、田上、川端、馬場(猛)
西沢 (6名)

◇ 平成2年度支部通常総会

日 時 5月13日 午前11時
場 所 熊本市大江町 NTT熊本会館
議 題 事業計画、予算、支部規約一部改正。
役員改選(奥野支部長、本田副支部
長再選) 支部報2号の発行と予算
措置(支部費の徴収)
出席者 奥野、西沢、宮崎(豊)、馬場(猛)、
石井、本田、田上、和仁古、大木野
夫妻、菊池、中村(恵)、河上、樋口
(14名)

◇ 平成2年度日本山岳会通常総会

日 時 5月16日 午後4時30分
場 所 東京都千代田区平河町 全共連ビル
出席者 奥野、本田 (213名)

◇ 支部委員会

日 時 6月12日 午後7時
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
議 題 総会付託事項、支部規約改正(支部

費年額2,000円) 春季例会計画。

出席者 奥野、本田、田上、川端 (4名)

◇ 夏季例会(山の映画とビールの夕べ)

日 時 8月25日 午後6時45分
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内 容 神谷会員のビデオ作品「秋の白髪岳、
早春の仰鳥帽子山、夏山涼域」を上
映、広永会員のパネル写真「山の花」
展示、新入会員紹介(深堀弘泰氏)
ゲストに古原和美氏(長野県在住の
会員、元熊本岳連理事長)を迎えて
歓談した。

出席者 奥野、西沢、宮崎(豊)、石井、本田、
田上、大木野夫妻、門脇、中村(恵)
樋口、広永、神谷夫妻、加藤、吉田
藤本、池崎、宮崎(守)、出来田、深
堀、古原 (22名)

◇ 自然保護全国集会(静岡)

日 時 9月15日、16日
場 所 静岡県三島市 「箱根の里」
議 題 分科会による討議及び各支部(地域)
の自然保護情報交換。
出席者 田上常務委員 (75名)

◇ 全国支部懇談会(90歳王の集い)

日 時 10月13日、14日
場 所 山形市蔵王温泉 蔵王アストリア・
ホテル
内 容 全国支部事務担当者会議、山形支部
40周年記念祝宴及び懇談会。
14日、蔵王最高峰の熊野岳(1,841m)
登山。
出席者 石井、本田 (170名)

◇ 秋季例会(石堂山)

日 時 10月27日、28日
場 所 宮崎県西米良村村所 「富士屋」

内 容 27日午後6時富士屋集合、懇親会。
28日午前8時出発、石堂山(1,547m)
に登る。なお奥野支部長ほか3名は
天包山(1,189m)に登った。
参加者 奥野、西沢、石井、本田、田上、
和仁古、大木野夫妻、川端、河上
神谷夫妻、藤本、池崎 (14名)

◇ 第6回宮崎ウェストン祭(三秀台)
日 時 11月3日 午前9時
場 所 宮崎県高千穂町 五ヶ所高原三秀台
内 容 ウェストン師の祖母登山100周年に
あたり、宮崎支部と高千穂町共催に
より盛大に実施された。本部及び九
州各支部からも多数参加あり。
出席者 奥野、本田

◇ 東九州支部30周年記念90由布岳の集い
日 時 11月3日、4日
場 所 大分県湯布院町 湯布院ハイツ
内 容 11月3日、山田会長の記念講演及び
懇親会。11月4日、東登山口より由
布岳(1,584m)に登山する。
出席者 奥野、馬場夫妻、本田、田上

◇ 日本山岳会平成2年度晩餐会
日 時 12月1日
場 所 東京都品川 新高輪プリンスホテル
内 容 皇太子殿下をお迎えして盛大に開催。
なお、新永年会員として奥野支部長
はじめ6名が紹介された。
出席者 奥野、西沢、川端 (622名)

◇ 支部委員会
日 時 12月9日 午後5時
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
議 題 支部報第2号の編集、平成3年度事
業計画、役員改選など。
出席者 奥野、本田、田上、和仁古、川端、

松本、西沢 (7名)

◇ 新年晩餐会
日 時 1月12日 午後6時30分
場 所 熊本市内坪井 ホルン山小屋
内 容 永年会員になられた奥野支部長の祝
賀も兼ねて盛大に開催された。
出席者 奥野、西沢、馬場夫妻、宮崎(豊)、
石井、本田、田上、工藤、松本、
大木野夫妻、門脇、川端、河上、
樋口夫妻、馬場(博)、広永、矢毛石、
藤本、池崎、出来田 (25名)

会 員 消 息

◎ 平成2年秋、支部は相次いで2人の会員
を失った。内田英夫さん(8412)と、玉名
金助さん(4425)である。玉名さんは支部
設立時からの会員であり、また熊本アルコ
ウ会の長老で、県岳連理事、県体協評議員
もされたことがあり、県内スポーツ界で顔
が広がった。内田さんは栄養部門の専門家
として、こちらも普く県内に足跡を残され
ている。玉名さん92才、内田さん77才とご
高齢ではあったが、夫々の貴重な経験に基
づくご助言を期待していたのに残念なこと
である。謹んでお二人のご冥福をお祈り申
し上げる。

◎ 昨年夏、松本莞爾さんからの便り、「今
夏はまた山ばかりで、7月29日から宮城県
のインターハイで蔵王に出掛け、そのあと
鳥海山、月山を登って来ました。(工藤先
生と同行です)8月11日に帰熊し、13日か
ら高校の屋久島合宿、18日に帰って国体九
州ブロック出席のため宮崎へ……」とある。
松本さんは東海大第2高校の先生、県岳連
の事務局長でもあり、岳務?多忙である。
文中にあった工藤文昭さんからも同様な便

りが寄せられたが、支部にはこのお二人のほかにも高校の先生が多い。石井久夫さん、川端浩文さん、廣永峻一さんである。みな夫々に専門の分野を持ち、支部の運営に寄与していただいている。

◎ 和仁古昇さんからの今年の賀状に、「昨年は69回、山に登りました。一番大きな山行は東南アジアの最高峰キナバル山でした。また、新しく登った山は21山でした……」とあった。前年よりやや少いが、昨年後半には体調を崩されたこともあり、また長年にわたる奥さんの看病の合い間を縫っての山行であり、敬服の外はない。

◎ 河上洋子さんは熊本市議会議員。今年は2期目になるため、4月の改選期を控えて運動最繁期。それでも秋季例会の石堂山や新年晩餐会には、何をおいても参加された。会えば、「山に行きたい……」とこぼすことしきり。

◎ 馬場博行さんは、昨年5月に自転車で、四国一周650kmを走破したが、今冬はさらに「韓国縦断往復1,150km自転車冒険旅行と雪岳山登山」と銘打って、12月下旬に熊本を出発、寒風吹荒ぶ韓国東海岸の道走り風雪の雪岳山に登頂し、半月の予定を数日早めて帰ってきた。既に不惑を越えたとはいえ、より大きな目標へ向けて不断のトレーニング。タクラマカン砂漠横断とムズターグ峰登頂、チベット縦断自転車旅行、アンナプルナ4峰とヒムルンヒマールの単独リターンマッチと計画のストックは多いが、夢の実現に向けてがんばってほしい。

◎ 大牟田市在住の馬場 猛さんは、昭和34年入会の古い会員。当時は福岡に支部がなかったため熊本支部に入ったが、例会には

いつも千代子夫人と一諸に参加される。その感化をうけてか、その後ご夫妻での参加が増えた。即ち、樋口格・洋子夫妻、大木野徳敏・マツ子夫妻、神谷平吉・文子夫妻などであるが、小所帯の支部にとっては有難い傾向である。その功労者、馬場夫妻の昨年の軌跡は、3月北海道佐幌スキー、7月八ヶ岳南部、それに9月と12月に2回続けてトルコのツアー。湾岸情勢緊迫の煽りをうけて東部には行けず、西海岸を廻ったが、それでもカイセリでエルジェス(3,916m)やハツサン(3,268m)を鮮明に眺めることができたこと、喜んでいて。年明けて2月には八方尾根スキー行、ゆっくり楽しんできたとのこと。

(本田 記)

編 集 雑 感

支部報をつくるのが、これ程たいへんなことであるとは知らなかった。当然、私の非才によるものではあるが、第1号で懲りずに第2号も引受けてしまった。支部総会で支部報継続が承認され、その予算措置として支部規約を一部改正して、支部費をいただくことになった。還元金だけでは賅いきれないからであるが、それにしても交流の核にしようとの、会員の皆さんの熱意がなければできないことである。編集方針にはっきりしたものがなく、今回も総花的に原稿を集めたため「文集」のようなものになってしまった。しかし、支部会員のありのままの現在がでていて、よしとするか。次回からは記録に重点を置き九州の山の紹介、熊本の登山史メモなども収録したいと考えている。

(本田 記)